

## 炭鉱からみる近代

### —マニフェスタ9 と‘文化’資源としての〈炭鉱〉展を中心に

角本摩衣子

昨年、ベルギーの北東部リンブルフ州のヘンクで9 度目の欧州現代美術ビエンナーレ（以下、マニフェスタ）が開催された。世界中でさまざまな国際展が乱立する今、1996 年の初回以来、隔年ごとにヨーロッパの異なる都市で開催されるという点で、このマニフェスタは異彩を放っている。更に、”The Deep of the Modern／近代の深遠”というテーマを掲げ、実際に使用されていた炭鉱施設を舞台に、炭鉱に関連した近代から現代までの美術作品をとり上げた今展（以下、マニフェスタ9）は、「いわゆる現代美術展のベーシックな展覧会モデルからの切り離しを故意に行った」とキュレーター・チームが自負する内容となっていた。本発表においては、同じく炭鉱を通して近代を捉えようとした「‘文化’資源としての〈炭鉱〉」展（目黒区美術館、2009年）とマニフェスタ9 との比較を試み、炭鉱を通じた両国の近代化の一端を紹介したい。